平成１３年度　異文化交流論研究室

フィールドワーク in Okinawa

平成14年3月18日（月）～21日（木）

オルターナティブな教育に関する報告書

命どう宝～自分らしく生きる人々を訪ねて～

〔命は宝であり尊いものである〕

ちゅらさん（ゼミ生）とトミーズの雅＆健

発行日：平成14年6月1日
編集責任者：岩野雅子
執筆者：石津由美・岡田裕美・谷口朋子・松下道子・屋住沙代

＜目次＞

パートⅠ：フィールドワーク報告

1．沖縄アメラジアン・スクール
　－二つの文化に生きる：母親の願い・子どもの願い　岡田裕美 1

2．沖縄アクターズスクール
　－踊り、そして自分に対する真剣なまなざし　石津由美 7

3．子ども達の夢の学校
　—ドリームプラネット・インターナショナルスクールを訪ねて
　屋住沙代 11

4．沖縄国際大学訪問
　－同じ場所での体験の積み重ね　松下道子 15

5．戦争と平和について考える
　－かたりべと出会って　谷口朋子 19

パートⅡ：沖縄で異文化体験！

・ミンサー織り　H.O. 22
・沖縄の言葉　H.O. 22
・シーサー（獅子）　M.M. 23
・沖縄の伝統衣装（琉装）　M.M. 23
・首里城公園にて　T.T. 24
・うちなんちゅう　T.T. 25
・国際通り－おみやげ編－　Y.I. 25
・健康的で長寿の沖縄料理　Y.I. 26
・公設市場にて　S.Y. 26

フィールドワークの訪問先

パートI：フィールドワーク報告

1．沖縄アメラジアン・スクール訪問
ー二つの文化に生きる：母親の願い・子どもの願い

岡田裕美

＜編集者から＞

平成11年秋の朝日新聞にアメラジアン・スクールのことが紹介された。沖縄サミットを機会にアメラジアン・スクールに光があたった。アメリカ側からの教科書提供の申し入れ、日本政府や地方自治体からの学校移転への資金提供の提案、アメリカに帰国した父親に扶養手当を請求するための法律支援などなど。故小渕首相との面会を境に、アメラジアン・スクールでは支援の電話が鳴り続いたという。

「違いを超えてー教室の中の多文化」と題した朝日新聞の連載では、沖縄戦を体験した沖縄だからこそ、アメリカ人と日本人との狭間でどちらにも入りきれないアメラジアンの体験が紹介された。アメリカ軍基地やその向こうにあるアメリカ社会にも、沖縄のコミュニティや日本社会や学校にも「居場所」がないと感じる人々の存在と思いが伝えられた。

「アメラジアンが主役の学校をつくりたい」、「どちらか片方を選ばなくてよいダブルスを包み込む柔らかい社会に変えたい」という願いをもつ母親たち。今回の訪問では、セイヤーみどりさんとともにアメラジアン・スクール評議会代表を務める与那嶺政江さんにお話を伺うことができた。

（1）はじめに

今回の専門演習フィールドワークの目的は、学校外教育・ノンフォーマルエデュケーション・オルターナティブな教育の場として、また異文化の壁を越える存在としてのインターナショナルスクールを訪問し、教育理念や目標、教育内容や現場に触れる、というものであった。そして私たちは、沖縄の宜野湾市にあるアメラジアン・スクール（AmerAsian School in Okinawa：AASO）を訪問させていただくことになった。訪問するにあたり、私たちは『アメラジアンスクールー共生の平和を沖縄からー』（ふきのとう書房）という本を読み、スクールを開校するに至った過程と苦労、スクールの重要性など様々なことを知った。また、アメラジアン・スクールが編集した資料集３冊も送られてきて、「事前学習をしてから訪問してください」という厳しい注文がついた。

ここではまず、沖縄にAASOが開校された過程について簡単に説明したい。沖縄では、米軍基地の建設により米軍軍人と日本人女性が結婚するケースが増え、アメリカン（American）とアジアン（Asian）の間に子ども（AmerAsian）が多く生まれた。戦後の状況やその後の背景などについては、ドキュメンタリー作家レジイ・ライフ氏による「日米二つの文化に生きる」（NHKで放送）に詳しい。そのようなダブルス（過去にはハーフと称された）の子どもは、父親が基地に勤務している場合は基地の中の学校に行けるが、基地をやめた場合や離婚した場合は、公立の学校に通うことになる。公立の学校ではアメリカ人の容姿であるだけで英語が話せると思われたり、話せないことが分かるとばかにされたり、容姿が違うだけでいじめられたりといった、アメラジアンの子どもにとって辛い環境であることが多かった。日米のどちらでもないならば、自分の生まれ育った「沖縄の人になりたい」「沖縄の人と結婚すれば沖縄の人になれる」といった思いを持つ者もあったが、簡単に沖縄や日本、アメリカといった社会に受け入れられるものではないことを思い知らされるだけであった。

そこで1988年、アメラジアンたちに「ハーフではなくダブル」としての誇りを持ち、胸を張って生きていけるようにという願いを込めて、5人の保護者が自分たちで出資をしてAASOは開校した。AASOの教育は英語で行なわれる。家庭では日本語を話す子ども達に、もう一つのアイデンティティである英語の環境を用意するためにである。また、父親がいる家庭で英語を話す父親とのコミュニケーションを深めるためには、子どもが英語を話せ

ること、すなわちバイリンガルであることが大切である。放っておくと日本語に偏りがちになる子どもは、母親とは親密な関係を保てるが、日本語のできない父親は疎外感を感じやすいという。現在は民間の教育施設いわゆるフリースクールとして位置づけられ、学区の公立学校へ入ったまま AASO で学び義務教育の学歴保障を得て、学校区の学校を卒業したという認定を受けるしくみができている。これは、日本社会全体の現象としての不登校児の激増によるものであり、同様のシステムをアメラジアン・スクールに適用する運動を、アメラジアン・スクール側が起こした結果による。幼稚園から中学部までもっているが、中学という義務教育を修了した時点で新たな問題がでてきた。それは、英語で行なった教育では、普通の高校に入るだけの日本語ができないという問題である。英語はもちろん、数学や理科といった科目はほぼ対応できるが、国語(日本語)や社会といった科目の入学試験を受けるには個別の指導が必要になってくる。従来は、インターナショナル・スクールへ進学する道しかなかったが、昨年高校入試に合格した子どもがでてきたことを受けて、アメラジアン・スクール内では新しい希望も生まれてきている。

（2）アメラジアンスクール訪問

2月21日、フィールドワークの最終日。ホテルをチェックアウトし、琉球村へ立ち寄った後、米軍基地を横に車を走らせ、宜野湾市にある AASO へ向かった。道沿いにどこまでも続く基地を見ながら、沖縄で基地が大きな土地を占めていることをあらためて実感し、沖縄の抱えている基地問題の深刻さを感じた。街の中心部を占めるこれらの基地が沖縄の人々に返還されたなら、沖縄の人々はここをどんな街に変えていく夢をもっているのだろうか。

AASO を見つけるのは大変だった。AASO は大きな道路から路地に入った住宅街の中にあり、コンクリート造りの二階建てと一階建てのプレハブの建物でできていた。教室は外から見えないようにカーテンがしてあった。狭い教室で学ばなければならない子ども達、2つしかないトイレを50名近くが順番で使わなければならない現状、スポーツもできない狭い庭。そういった状況は、2億数千万円をかけて政府と宜野湾市が提案する学校移転で解消されるはずである（ただし、学校建設用の土地購入費と建設費用のみ。年間1千万円かかる学校運営費用は予定されていない）。しかし、あくまでも学校復帰のための人材育成の一次的施設としてアメラジアン・スクールを位置付けたい行政側と、ダブルスの学校として独立したものをつくりたいアメラジアン・スクール側との間の交渉は進展していない。行政の示す2億円というお金に惑わされず、信念を貫こうとするアメラジアン・スクールの強さに、母親側の長く強い思いがあることが察せられた。

学校の規定で、訪問と見学はお昼休みの間の1時間のみと決められている。これは、故小淵首相からの支援策の発表後、マスコミや訪問者が殺到し、子ども達の学習環境が侵害されたことによる。子ども達の授業が終わって出てくるのを待っている間、事務所の方にお話を伺った。この方は元学校教員で、AASO でボランティアとして日本語を教えたことから、今はアメラジアン・スクールの事務を引き受けておられるという。「教室の中を見られても良いですが、狭いんですよ」と言われる。すでにインターネットのホームページにさまざまな写真が掲載されている。一階建てのプレハブ教室の方はざっと見せていただいたが、普通の民家をそのまま学習塾のような形で利用しているという二階建ての方に上がりこむことは遠慮することにした。

昼休みになって、思い思いの場所でお弁当やサンドイッチを開く子ども達のそばで、与那嶺さんからお話を伺った。与那嶺さんは中学校の英語教師で、お昼の渋滞のなか那覇市内から1時間もかけてわざわざ駆けつけてくださった。また1時間かけて午後の授業にもどらないといけないからと、30分間だけお話を伺った。その後は外国人の先生にお話を伺ったり、子どもたちに話を聞いたりして見学を終了した。

（3）アメラジアンスクールの概要

AASOには4、5歳から中学生までの約50名が通っており、クラスは4、5歳の幼稚園クラス、小学校1、2年生の低学年クラス、小学校3年生から6年生の中学年クラス（日本語が主なクラスと、英語が主なクラスの2つに分かれている）、中学生の高学年クラスといった5つに分かれている。時間は、幼稚園は9時から15時半まで、それ以上のクラスは9時から16時までである。南は糸満市から、北は読谷市までと生徒の通う範囲が広く、保護者が迎えにくるまで時間がかかるため19時までは預かっている。親が早くから仕事に行くため、7時半から建物の外で待っている生徒もいるという。

先生はほとんどアメリカ人で、授業は8割がアメリカ式で、教科書もアメリカのものを使い、読み書き、数学、理科、社会を英語で教えている。日本語クラスは週2コマある。日本語の先生は、日本の教科書で文化的なことも含めて教えている。この4月からは土曜日は休みになったが、それまでの土曜日は日本語で授業を行ったり、文化やスポーツを教えていた。

子ども達の学籍は公立学校にあり、出席簿は毎月、学習の記録は毎学期公立学校に送り、卒業資格をもらっている。授業日数は公立学校に合わせている。去年(2001年)の4月からは、公立高校を受けられるようになったので、中学3年生には受験対策をしている。彼らは国語、特に漢字にハンディがある。そのため、国語のみでなく、他の教科でも日本語で書かれた問題の意味が分からないことがあるので、対策として3年生は放課後に補講を受けさせるようにしている。去年の2月からは、県の助成財団から日本語の先生がフルタイムで派遣されるようになったので助かっているという。また、新聞広告で募集した34人のボランティア（主婦、学生など）がマンツーマンで日本語を教えてくれている。全国からのサポート会員の会費や寄付があるのも運営の助けとなっている。学校の運営費用(主として教員への報酬、建物の借り賃、電気代や水道代など)は子ども達からの授業料、会費や寄付で賄うようにしているが厳しいものがあり、代表者などのもちだしが必要になることもある。

学校でいじめられていた経験をもった子どもが多いので、校則としては「お互いを尊重すること」を掲げている。フレンドシップ・キャンプでさまざまな人々と交流する機会をもつほか、修学旅行ではみんな一緒に韓国へ行くそうである。

（4）与那嶺政江さんのお話

AASOの問題点、新校舎建設問題などについて与那嶺さんに伺った。与那嶺さんは、アメラジアンの子どもを持つ母親で、子どもを通わせていた学校に失望し、アメラジアンのための学校の必要性を感じてAASOを立ち上げた1人である。現在AASOの評議会代表の一人で、公立の学校の英語教師である。

与那嶺さんによると、今の学校の問題点としては、まず設備的な問題があるという。第一はトイレが2つしかないこと。そこで、トイレは授業中いつでも行っていいことにして、休み時間に子ども達が殺到することのないように工夫している。第二は手洗い場が1つしかないこと、第三は校庭が狭く、体育をする場がないことである。琉球大学の学生がボランティアで子ども達の体力測定に来てくれた時に、体力のレベルが非常に劣っていることが明らかになり、体育などの授業がなされていないことの反省になったという。

次に、資金的な問題。毎月の月謝として2万5千円の授業料を徴収し、助成金（毎年の国際婦人クラブから受けるものと単発のものなど）などもあるが、運営面は大変厳しい。そこで、教科書も寄付に頼っている。ホームページや口コミでAASOを知ったサポート会員が全国に450人にいて、1口3千円の寄付をすると、AASOについての情報が届くという制度がある。会員は沖縄県内の人よりも県外の人の方が多いそうである。沖縄の人だからこそ、アメラジアンに寛容になれるのではという私の想像とは反対の事実に、「なぜ」という疑問が沸いてくる。

さらに、先生と親とのコミュニケーションがとれないという問題がある。担任と親との

面談や会合を２、３カ月に１回程度開催しているが、仕事の関係で出席できない人が多い。経済的な事情で、夕方遅くまで、あるいは夜も働かなければならない母親が多いためである。そこで、日曜日などを利用して、Boy's Club や Girl's Club に頼んで親子で一緒にスポーツを楽しめる企画などをたて、親とのコミュニケーションをとっていくようにしたいということであった。

最後に、教室が狭いため、入学希望者は多いが入学させられないという問題がある。入学を待っている子ども達は多い。そこで期待されるのは、新しい学校の建設である。新しい校舎ができたら入学定員も増やせるし、設備的な面でも良くなるので心待ちにしているそうである。これについては、グローバル化、国際化時代に対応した、柔軟で多様な学校のあり方についての行政側の歩み寄りを期待したい。全国のインターナショナル・スクール、専門学校、フリースクールなど、現在正規の学校として認められていない教育施設がネットワークを結んで、中央・地方政府にロビーをし続けることが必要であるし、私達のような一般市民にももっとこういった問題に声をあげてほしいということだった。

与那嶺さんの子ども達への思いは強く、抱いている夢も大きい。「いわゆるハーフの子は英語を話せると『いいね』と言われるが、話せないと『なーんだ』と言われる。英語が話せないと自己嫌悪に陥る。英語を話せないハーフは、『島ハーフ』といって差別される。子供は純真で素直だから、いじめも起こりやすい。アメラジアンの子ども達は特に、中学校までに自分にプライドを確立させる必要がある。子どもが自分を失わずに生きていければいいと思い、AASO の開校に踏み切った。日本は単一民族ではなくなっているのに、公立の学校は日本人を育てることしかできない。これからの時代は、学校にも色々選択肢があった方がいいと思う。もっと教育の幅を広げるべきだと思うし、そのためには、政府の方針が変わるべきだし、教育改革が必要だと思う。こういった方向に向けて、一刻も早く教育改革が行われることを望んでいる。」

小柄な与那嶺さんが、とても大きな存在として目の前に立たれていて、学生の私たちには声に出す言葉が見つからなかった。

（５）生徒との会話

昼休みが終わって子ども達が元気良く外へ出てくると、先生が「Wash your hand」と声を掛けた。一つしかない手洗い場で、子ども達は順番に手を洗った。それから外にある大きなテーブルの周りに座って、お弁当を食べ始めた。日本語と英語の両方の言語でおしゃべりが飛び交っていた。お弁当の後は、鬼ごっこをしたり、紙飛行機を飛ばして遊んだり、仲の良い子と集まって話をしたり、それぞれが楽しそうに過ごしていた。その中で、私たちはちらばっている子ども達に声をかけてみた。中学生の女の子との話は次のようなものであった。

Ｑ：好きな教科は何かな？
Ａ：数学と理科かな。
Ｑ：学校で何をしている時が楽しい？
Ａ：休み時間に友達とおしゃべりしている時が楽しい。
Ｑ：学校でできたらいいなーと思うことは？
Ａ：校庭が狭くて体育ができないから、やっぱり体育やりたいな。

子ども達は、とても気さくに話してくれた。子ども達の話によると、AASO へ来る前はいじめられたり、英語ができななかったりしたために、劣等感を感じて自分を失っていることが多かったそうだ。しかし、AASO へ来てからは自分をさらけ出して、素直に楽しく生きていけるようになったそうだ。「居場所」をみつけて、この場所で楽しそうにしている彼ら・彼女らを見ていて、それぞれの子どものニーズに合った多様な学校のあることが、何より大切なのだと思った。

（6）おわりに

沖縄に来てみて、私は本当に多くのことを学んだ。沖縄といえば青いきれいな海、といったイメージが真っ先にあり、観光リゾート地といったイメージが強く、様々な問題のあることについては知っていたが、沖縄に実際に来てみて初めてその問題の大きさを実感することができた。AASO を訪問して、沖縄の基地が残した課題の一つとしてアメラジアンの存在の大きさを改めて感じた。基地という大きな問題の影で、アメラジアンという数多くの人間が存在している。1988 年の AASO 開校は、アメラジアンが沖縄で居場所をみつけて生きていくための第一歩であり、今回の学校移転計画はアメラジアンが沖縄や日本と共生していくための第一歩であるべきはずである。

それにしても、学校って何だろう？　普通の学校って何だろう？　私たちが通ってきた普通の学校が「普通」だといい、インターナショナル・スクールやアメラジアン・スクールが「普通」の学校でないというのはなぜ？　英語とか日本語とかいう言葉の問題なのか、指導要領とか教科書とかいう内容の問題なのか。みんな同じように生活し、進級し、同じ物を使って勉強する「普通」の学校の方が、逆におかしいような感じもしてくる。アメラジアンの子ども達をみていると、いろいろな人がいて、いろいろな言葉を話し、違った価値感を大切にしあう雰囲気が普通のような感覚に陥る。

今回は昼休みの１時間だけ見学が許されており、そのような限られた時間で、どのような状況で見学できるのかについては事前に予想がつかなかった。そこで、短時間に対話する相手との状況を把握し、少なくとも親しみをもって迎えられるような雰囲気を形成し、いかに多くの情報を収集するかが重要であった。AASO には大勢の訪問者が来るが、そのほとんどは「体験の搾取者」であって、アメラジアン・スクール側には何のメリットもない。私たちがこの訪問を体験の搾取に終わらせないためにはどうすればいいのか？

そのために、まずはサポート会員になり、今後のアメラジアン・スクールの将来に関する情報を得るとともに、小さいながらも会員としての支援の声を届けることができるだろう。そして、少しでも多くの人にこの体験から学んだことを伝えていきたいと思う。

報告の最後に、AASO の子ども達、そして、快く話をしてくださった学校の方々に心から感謝したい。

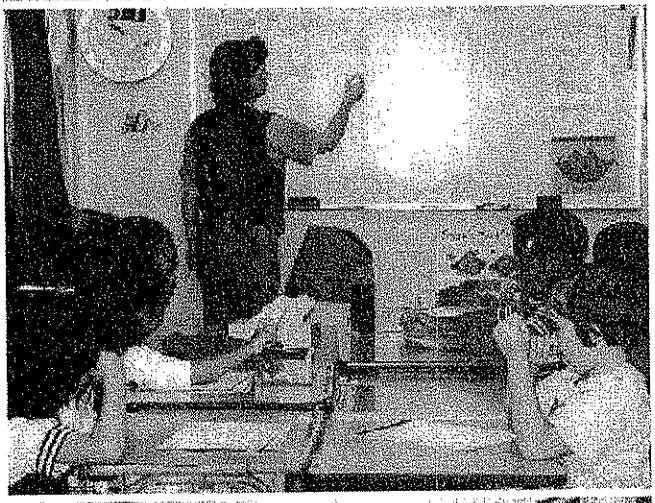
なお、サポート会員の年会費は一口３千円。年４回のニュースレターが届き、子ども達や教師の様子、ボランティアのスタッフ、アメラジアンの教育権を考える会の活動状況などを知ることができる。詳しくはインターネット上で「アメラジアン・スクール」で検索できる。

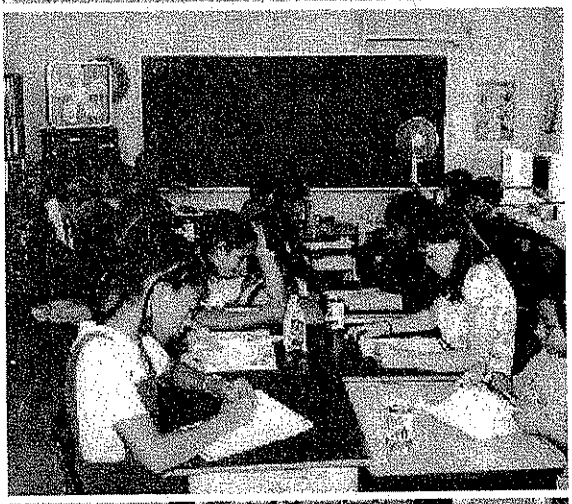
<次ページ資料：アメラジアン・スクールのホームページより>

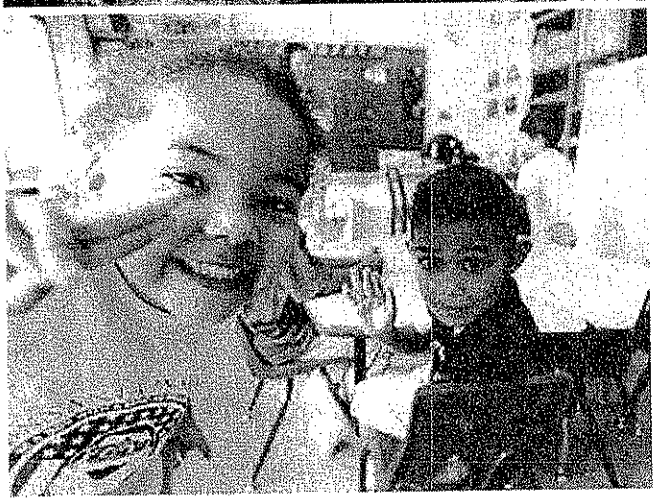
アメラジアン・スクール・イン・オキナワ
AmerAsian School in Okinawa (AASO)

AASO は、1998年6月、5人の保護者の出資により開校しました。
アメラジアンの子どもたちに「ハーフではなくダブル」としての誇りをもち、胸を張って生きていけるようにとのめ開校させた多文化教育を目指すスクールです。

現在は、民間の教育施設いわゆる不登校の通うフリースクールとして、位置づけられ、学区の公立学校へいたまま、AASO で学び義務教育の学歴保障を得ています。







２．沖縄アクターズスクール
ー踊り、そして自分に対する真剣なまなざしー　　石津由美

＜編集者から＞

安室奈美恵、MAX、SPEED などの育ての親であるマキノ正幸氏が経営する沖縄アクターズスクールの存在はあまりにも有名である。そこは芸能人を生み出す「魔法の場所」といわれてきたが、実際には不登校の子ども達が居場所を求める場、正規の学校では個性が伸ばせないと感じる子ども達が「何か別のもの」を求めってやってくる場でもあった。音楽や歌、ダンスがどうしようもなく好きという子ども達、そこに没頭する自分に個性を伸ばす可能性を感じる子ども達、芸能界なんてと親に反対されながら通ってくる子ども達、芸能界には興味がないがこの場所が好きという子ども達と、さまざまだ。

同じように踊りが好きで好きでたまらないという、３歳からダンスを続けているゼミ学生の情熱で、沖縄アクターズ・スクールへの訪問が実現した。

シーンと静まりかえるスタジオで、鏡に映る自分のポーズに見入りながら音楽のスタートを待つ子ども達。第１音が鳴り出すと同時に動き出す身体。私たちが一番引きつけられたのは、子ども達の真剣な「目」、「まなざし」だった。それから、自分に自信をもっている「顔つき」、そして「身体」からスタジオの空間に放たれるエネルギー。一瞬、雷に打たれたような不思議なショック状態で、私たちの訪問は始まった。

（１）沖縄アクターズスクールの訪問にあたって

沖縄にフィールドワークに行くことが決まり、船井幸雄著「21 世紀を創る本物教育」（２００２年、ビジネス社）を読んだ。この本の第３章に「誰にも輝ける場所がある」というテーマで沖縄アクターズスクールのことが紹介してあり、それを参考に訪問依頼の手紙を出してみた。返事は OK とのこと。

２月１９日、国際通りの三越を目印に沖縄アクターズスクールに向かった。沖縄アクターズスクールは、エレベーターに乗ってファッションシティーMAXY３階の頑丈な扉を開いたところにあった。まず中に入ると事務所があり、担当の方がスタジオに案内してくださった。四面鏡張りのスタジオに入ると、すでに B.B.WAVES のみんながミーティングをしていた。私たちは入り口付近に並べてある椅子に座り、約束の 17 時半から１時間のレッスンを見学させていただいた。

（２）沖縄アクターズスクールの方針

沖縄アクターズスクールからは、安室奈美恵、SPEED、MAX、DA PUNP など数多くのスターが輩出されている。俳優養成所として有名であったのだが、現在は子どもたちの中に眠る才能を見出し育成する場となっている。ここでいう育成とは、歌うことや踊ることを教え込むというのではなく、子どもたちが自分の才能と向き合い、自分自身のなかの「オンリーワン」を見つけ出すための「環境」（＝自己との戦いの場）を提供することを意味しているそうである。

ここには一つだけルールがある。それは「他人に迷惑をかけない」ということだ。同じ目的意識を持った仲間がお互いを思いやり、信頼関係を築いていく。そして、みんなと一緒にいるこの環境のなかで、歌やダンスを通して「自分」という人間を磨いていく。さらに、エンターティメントにとって最も大切な、「人のために一生懸命になれるハート」を持つ。

沖縄アクターズスクールには、「先生」という立場で教えるという概念がない。代わりに、才能を認められた BB.WAVES のメンバーが、インストラクターとしてリーダーシップをとり、子どもたちを引っ張っていっている。また、子ども同士が刺激しあい、教え合うことにより、大きなエネルギーと才能が生まれてくる。

レッスンは個々の才能をぶつけ合うことでエネルギーを高め、その中から「感性を育てていくこと」に重点を置いている。「エンターティメントとは与えられるものではなく、自分の中から生み出していくものだ」という理念のもと、沖縄アクターズ・スクールでは才能が育つ環境を作ること、そして感性を育てることに力を注いでいる。

（3）B.B.WAVES

B.B.WAVES とは“beautiful beat waves”～美しいビートの波が世界へ向けておしよせる～という意味をもった、沖縄アクターズスクールのトップチームである。1996 年に、沖縄アクターズスクールで才能を認められた小学生から成人にいたるまでの幅広い年齢層のメンバーによって結成された。

現在は、大阪校、横浜校のメンバーも含む総勢 150 人のグループとして日本全国でコンサートやイベントを展開している。作詞、作曲、振付、演出からプロモーションにいたるまで、すべて自分達で行うという、あらゆる才能が集まった驚異的な才能集団である。

（4）レッスンの内容

・ハイパークラス

年齢、性別を問わないクラス。歌やダンスを楽しみたい、何か新しいことにチャレンジしてみたい、親子で一緒にダンスを楽しみたい、シェイプアップや健康増進のため等、目的は様々である。歌とダンスをもっともっと好きになることから始め、年齢や性別を問わないため、幅広いコミュニケーションがとれ、みんなで楽しい空気を作りながら歌やダンスを楽しめるクラスである。

・メインクラス

歌とダンスを純粋に楽しむことから、自分のハートをエンターティメントを通じて表現すること、それによっていかに人の心をふるわせることができるかをテーマに、自分の中に眠る可能性、才能を見出し育成していくクラス。感性を磨いていく。自分にだけしかないものを追求していく。ハートを育てる。コミュニケーションをとり、信頼関係を築き上げていく。

（5）レッスンの様子

「５・４・３・２・１・song」のかけ声で、激しい調子の音楽が始まる。途端に、鏡に映る自分の向こう側にいる観客をイメージして、一人一人が笑顔と自己最大の表現力をもって、ロック系の即興の踊りを始めていた。その瞬間には見ている私達全員が度肝を抜かれた感じだった。１曲終わると、また次の曲が用意される。

「30 秒前･･･」という言葉と同時に呼吸を整えたり、自分が舞台に立つイメージを作り上げるために集中力を高めたりする。「５・４・３・２・１・song」で、またロック系の曲が始まり、即興ダンスが始まった。カウントダウンされると同時に張り詰めた緊張感が一気にとけ、感情移入をし、表情も動きも豊かにリズミカルに踊る子ども達の瞬発力、気持ちを転換させる力などに圧倒させられた。

個人のダンスが終わると、次は二人組みを作り、目の前のパートナーの動きに対応する即興的なムーブメントによるダンスが始まった。これには相手があるだけに、創造力豊かに自分をアピールする動きを競っていた。二人がからみあったり、コントラストに動いてみたりフォーカスを工夫してみたり…。二人のコラボレーションがおもしろかった。

彼らは常に鏡の向こうに観客がいることをイメージしている。そして、型にはまらない、自由な、自分らしいパワフルな踊りをみせてくれた。その表現や態度がストレートに伝わってきて、全身しびれてしまった。

（6）牧野アンナさんのお話－インストラクターの指導法－

沖縄アクターズスクールには、現在チーフインストラクターである牧野アンナさんをはじめ、８人のインストラクターがいる。ここでは技術面だけでなく、精神的な強さや相手を思いやる心などの人間性を重視し、認められた生徒がインストラクターとしてレッスンに参加し、リーダーシップをとりながらサポートしていく体制をとっている。

「才能は才能の中で伸びていく」とアンナさんはおっしゃった。例えば、生徒の中でリーダーシップをとる才能や、年上の子どもが年下の子どもを思いやっていく関係、先輩達と良い空気や協調性をつくっていったりできる才能などのように、子ども達それぞれの才能を生かし伸ばしていき、気持ちをつくり、それを身体でみせていくのが沖縄アクターズスクールの指導法だ。

グループワークをすることが多いので、ここでは人間関係をつくっていくことが最も大切になっている。まわりの人が自分の意見を聞くにも、自分が相手の意見を聞くにも、まずは人と人との間に信頼関係の樹立が必要で、信頼されないと自分が損をすることを学ぶ。やる気がない子は１日で追い抜かれていくことも身をもって知る。牧野インストラクターは、やる気になっている「フリ」をしている子どもと、本当にやる気になっている子どもとを見抜き区別する力、そして、やる気になるまで我慢して見守る態度が大切だと言われた。

（7）おわりに

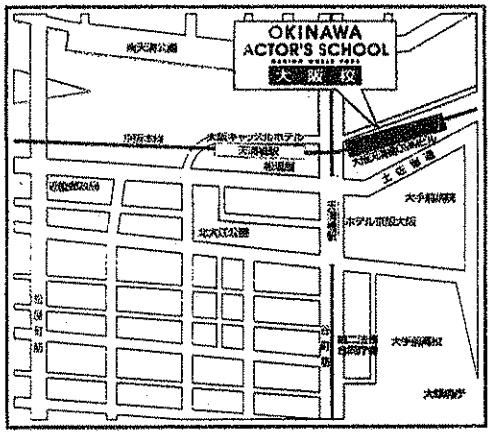
沖縄アクターズスクールの生徒のほとんどは学校へ行っていないそうだ。小学校や中学、高校の途中から様々な理由で学校に行けなくなった子ども達である。そのような子ども達の中で歌やダンスには集中できるという子ども達が、「居場所」を求めてここに通ってくる。子ども達の目的ははっきりしている。世の中では勉強ができる・できないという見方で子どもを価値づける傾向が大きいが、きっと沖縄アクターズスクールの生徒は別の意味で「できる子」なんだと感じさせられた。

テクニックの指導をすることはなく、そして励ますことすらしないこのスクールで、自分自身で技術を磨き、自分自身からやろうという気持ちをもち、落ち込んでも自分で立ち直り、心に火をつけて常に自分と向き合って戦いながら輝いて生きている。なぜ励ますことをしないのかというと、「自分のことで悩む人が、どうして人のために歌ったり踊ったりできるのか！」という言葉が牧野アンナさんから返ってきた。だから、やめていく子ども達を励ましたり、追ったりはしない。仲間達は、「隣でがんばっている『私』をみて、悩むのではなく考えろ」ということを、身体で表現するだけだ。

「才能は才能の中で伸びていく」ということを牧野アンナさんはおっしゃっていた。沖縄アクターズスクールの生徒は「今」を一生懸命生きている。将来良い仕事に就くために今は我慢して勉強するといったような考え方も、将来スターになるために今がんばるといった考え方も無い。「今」の「自分」を真剣に見つめる若いパワーから、たくさんの刺激をいただいた。

沖縄アクターズスクールの子ども達、そしてインストラクター、事務所の方々に御礼申し上げます。

＜次ページ資料は、沖縄アクターズスクールのパンフレットより＞



沖縄アクターズスクール
マキノワールドポップス大阪校

〒540-0008
大阪府大阪市中央区大手前1-7-31 OMMビルB4F
TEL.06-6910-3040
FAX.06-6910-3052

電車でのご案内

・地下鉄・・・・・・東梅田から谷町線で5分。
・京　阪・・・・・・淀屋橋から3分。
天満橋駅 下車、OMMビル地下2階が連結口

お車でのご案内

・名神高速・・・豊中ICより阪神高速（市内）乗継。
・阪神高速　環状線・・・北浜出口→天神橋→土佐堀通り→OMM
守口線・・・両替町出口→東天満→谷町筋→OMM
東大阪線・・・法円坂/森ノ宮出口→上町筋→京阪東口→OMM

※OMMビル駐車料金※ 1時間まで・・・450円（税込・軽四）

沖縄アクターズスクール
マキノワールドポップス横浜校

〒231-0023
神奈川県横浜市中区山下町山下公園地先海上氷川丸内
TEL.045-228-0345
FAX.045-228-0346

電車でのご案内

・JR根岸線 石川町 下車 徒歩15分。

バスでのご案内

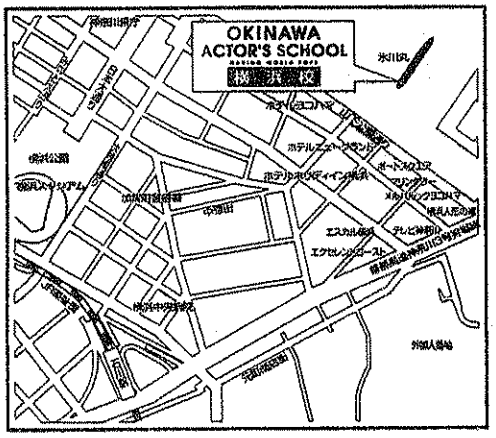
・桜木町駅（JR根岸線・東急東横線・市営地下鉄線）より乗車
日本新聞会館 下車徒歩5分・横浜公園前 下車徒歩2分

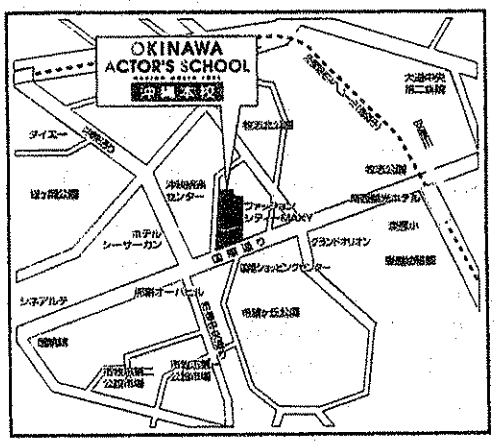
お車でのご案内

・首都高速湾岸線 横浜みなとみらい より10分
山下公園周辺 有料駐車場有り

水上バスでのご案内

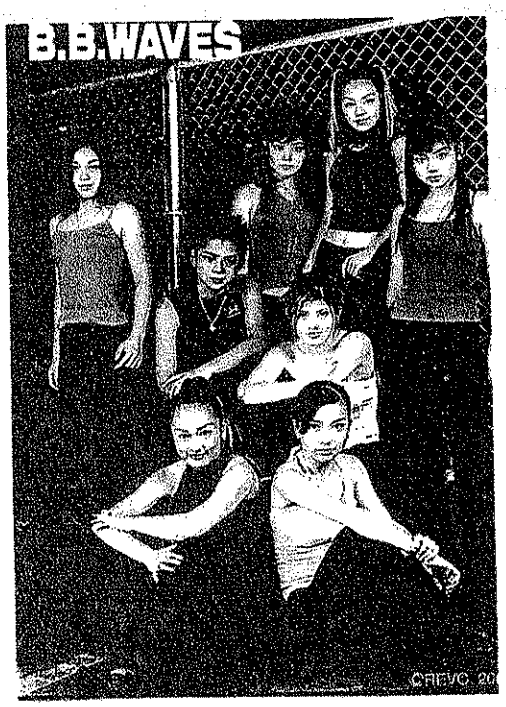
・横浜駅東口（そごうデパート裏）横浜公園 に乗船して20分





沖縄アクターズスクール
沖縄本校

〒900-0013
沖縄県那覇市牧志2-2-6 ファッションシティーMAXY3F
TEL.098-861-4190
FAX.098-866-1099



３．子どもたちの夢の学校
―ドリームプラネット・インターナショナルスクールを訪ねて　屋住　沙代

＜編集者から＞
「オンリーワン：ひとりひとりが地球上で唯一の個性」（マキノ正幸・島田晴雄著、レゾナンス出版、1998 年）や、「夢の学校にいらっしゃい」、「27 歳の校長先生」などの情報から、沖縄のドリームプラネット・インターナショナルスクールのことを知った。沖縄には他にも全国的に知られたフリースクールがいくつかあり、日本中から「居場所」を求めて子ども達が移動していく構図がある。バイリンガルやマルチリンガルの幼稚園の試みについても報道されたことがあり、いわゆる日本人の子ども達が、従来の学校の枠にはないものを求めている姿、そしてそれを受け入れようとする試みがなされている地域の一つであると感じる。
事前にフリースクールのことを知るために、山口市でフリースクールを主宰している方を招いての学習会を開いた。子ども達を取り巻く事情も、フリースクールの運営や方針も、「居場所」として設定する環境もさまざま。従来に比べればフリースクールへの認識は広まってきているが、ホーム・エデュケーションやコミュニティー・スクールのようなものが認定されている欧米のようには、まだ教育の概念も制度も多様化していない。
子どもにとって「夢」の学校とはどんなものなのか、その形の一つを見るために訪問を依頼してみた。

（１）はじめに
「フリースクール」という言葉については、沖縄に行く少し前の勉強会で初めて知った。フリースクールとは学校とは独立した教育機関であり、今まで私達が通ってきた学校のような組織や運営形態をとらない。フリースクールの最大の特徴は、教師や学校が主体ではなく、何より子どもが主体という認識に立つところにある。フリースクールはもともと海外で発展してきたものであったが、現在では日本にも多く存在し、たくさんの子どもたちが学んでいる。私たちの研究室では「学校」とは異なるもう一つの教育（オルターナティブな教育）に目を向け、沖縄でのフィールドワークではそういった教育の形をたくさんみるよう試みた。アメラジアン・スクールやアクターズスクール、ドリームプラネット・インターナショナルスクールを訪れたことは、私たちにとって「自分の目」でこのもう一つの教育の形をみる貴重な機会になったと思う。
私たちが今回訪問したドリームプラネット・インターナショナルスクール（略して DPIS、通称ドリプラ）は、沖縄本島のちょうど中心くらいに位置する恩納村にある。「日本に一つしかない、日本の子どもたちのためのインターナショナルスクールを目指して」と DPIS のパンフレットにあるように、独自の教育理念を持った学校である。小学校低学年から高校生までの子どもたち男女 150 名が集まった、この南の島の学校を覗いてみよう。

（２）これが学校！？
フィールドワーク３日目。３月下旬の沖縄は暖かい。この日はとても良い天気で、気温は 19 度くらいあった。ホテルを出て車で３０分くらい走り、ホテル・ムーンビーチ内にある DPIS に到着した。到着してまず初めの感想は「これが学校！？」ということ。外見は白壁の綺麗なホテル。校庭はホテルの芝生が広がる庭、そしてそれに続くコバルト・ブルーの海。中に入ってみると、馴染みの学校の教室や廊下とは全く違う光景があった。普通の教室の２倍はあろうと思われるような広――い教室！　教室の窓は全面ガラス張りで、外の陽の光と海や浜辺が目に飛び込んでくる。そして教室と教室の間の廊下はアーケードくらいはあろうと思われるような広さである。とにかく何もかもが広くて開放感のある場所だった。授業はまだ始まっていないのか、そこここで、たくさんの子どもたちがゲーム

をしたりおしゃべりをしたりと色々なことをやっている。９時半のスタッフと子どもたち全員が集まる全体ミーティングまでは自由時間となっているようだ。私たちは事務所へとまず向かったが、そこに行くまでもある事に驚かされた。それは、ここの子どもたちは目が合うと必ずにこっと笑って、「こんにちは！」とあいさつする事である。私たちのような突然の訪問者にも慣れているせいか、話しかけてきてくれる子もいた。ここの子どもたちはみんな明るくて、私が想像していた、いじめられて普通の学校では登校拒否になるような背景をもつ子どもたちとはどこか違っていた。

９時半になり、全体ミーティングが始まると、さっきまで廊下ではしゃいだり、遊んだりしていた子どもたちとはまた違う表情を見ることが出来た。全体ミーティングでは生徒やスタッフからの連絡事項や、意見交換が行われる。私たちも一緒に、後ろの方で参加させてもらった。そこでの子どもたちの言葉遣いはとても丁寧で、またその話を聞いている子どもたちの目も信じられないほど鋭く真剣そのものだった。みんな一生懸命に人の話に耳を傾け、発言をしている。ボーっと受け身でいる子はいなかった。その一日、自分が何をするのかがわからなくなったり、決められなくなったりしてしまうからだ。自己責任と自立。私たちは子どもたちのあまりの真剣さに圧倒されるばかりだった。DPIS の子どもたちがこういう話の聞き方ができるのは、この学校ではまずしっかりとした人間としての常識やマナーを学んでいるからこそではないかと思った。

（３）授業

DPIS には英語・コミュニケーション・スポーツという三つが必修授業としてある。一つの授業は１時間。必修以外にも歴史や自由課題のような様々な選択科目がある。私は小中学生以下の子ども達を対象としたコミュニケーションのクラスと、その次の「グラブ・バスケット」というコミュニケーションのクラスを見学した。初めに見学した小中学生以下のクラスは 10 人以下の少人数クラスで、次のクラスは 60～70 人の多人数が参加していた。それぞれのクラスで行っていることは異なるが、基本はコミュニケーションの原則を学びながら同時に英語も学ぶというところにある。どの子どもも普段から英語に接しているせいか、とても発音が良かったというのが印象に残っている。そして何より驚いたのは、クラスの中での先生の役割である。例えば子どもたちの間に意見の食い違いが出ると、すぐにみんなで話し合いや意見交換が行われる。そしてみんなでいっしょに考え、解決策を見つけ、実行する。ここでは普通の学校のように、先生が「～しなさい」と言ったりすることは決してない。先生はみんなが意見を出しやすいように見守り、導くという役割を持っている。

私たちが学んできた普通の学校とは違う点は、子どもたちが自分の思うところを積極的に発言しぶつけ合っていたことだ。小人数クラスを担当者していた白井智子さんは言う。「ここの原点は、みんなここにいたくているということ。いやいやだったり、真剣じゃなかったりすると、ちゃんと相手と向き合えないんです。」。この言葉は DPIS を象徴する一つの言葉になっている。「ここにいたくている」。ここの授業では、何かについて先生に教えてもらうというよりも、自分たちで考え、みんなで何かを創り出そうという姿勢が見られた。

上にあげた必修授業のほかには、小学校のタイム・テーブルには、アート、数学、日本語、科学、スポーツとアドベンチャー、テーマワークといったものが並んでいる。中学・高校生用には、歴史、コンピューター・グラフィックス、英語のアクティビティー（英語で読む・書く、プーさんと英語、イマジン、フレッシャーズ・イングリッシュなど）、世界情勢、日本語、ディスカッション・ミーティング、スポーツなどがある。子ども達はどれをやるのか、どの日には参加して参加しないのかなど、選べるようになっているようだ。

（4）昼食

午前中の授業が終わると、昼食の時間。学校の給食のように、廊下にホテルの食堂から給食が運ばれてくる。私達も列に並んで、おかずやごはんを担当の生徒についでもらった。1食500円の給食は、さけのムニエルやハンバーグ、スパゲッティなど種類が多くてどれもとてもおいしかった。食事が終わりトレイを返しにいくと、掲示板にその日のメニューのひとつひとつが紙に書かれて貼ってあった。「これは何だろう？」。よくよく見ると、さけのムニエルの紙には「Good！」とか「塩辛い！」などと書いてある。つまり、子どもたちがその日のメニューに対しての意見を書くという仕組みであった。子どもの意見をもとにおかずの味が変えられたり、新しいメニューが加えられたりするらしい。給食のあとは掃除で、自由時間のあとに午後の自由選択授業が続く。

子ども達は全員寮で暮らしている。寮は学校から少し離れた場所にあり、送迎バスで学校にやってくる。寮での生活はみんなで助け合うやり方で、年齢の低い子ども達を年上の子ども達が助けるようなやり方となっている。

（5）スタッフの声、子ども達の声

スタッフはチーフスタッフが3名。イギリス出身のキース・ゴードンさん、オーストラリア育ちの帰国子女である白井智子さん、そしてアメリカ育ちの帰国子女である村井優紀さん。さらに、スポーツその他の専門家として5名のスタッフがいる。アクターズスクールの現校長先生でもあり、このDPISの創始者はマキノ正幸氏。帰り際にマキノ氏にお礼を言うと、「時間があれば、お話しましょうか？」とのお申し出が！　私たちは緊張しながらも「ぜひお願いします！」と応えた。

マキノさんはとても６０代とは思えないほど若々しくてパワーあふれる人だった。「人間は死ぬまでコミュニケーションなんですよ。」まず初めにこう言われた。DPISを創ったのは、豊かな人間性を持った人間を世に送り出そうという思いが根底にあったこと。そして、その豊かな人間性を身につけるための熱い思いや、また沖縄や政治などについても語って下さった。人生や社会についてのお話のひとつひとつが、私たちの既製概念をことごとくくつがえすもので、最期には、あまりの強烈なインパクトに私たちは頭は「真っ白！」になってしまった。今までの私たちが考えてきた常識は常識でなかったのか・・・と思ってしまうほど、その場にいた私たち全員がすごい刺激を受けたのだった。

では、「普通」の学校から逃げ出してきた子ども達、「普通」の学校でいじめられていた子ども達、「普通」の学校に行けなくなったり休学したり退学したりした子ども達、自分で見つけて親に頼みこんで沖縄の「ここ」にやって来た子ども達の声は？　子ども達が書いたものを少し紹介したい。

- 「私にとって唯一誇れる場所であり、誇れる人のいるところ。私にとってかけがえのない場所。信じること、優しさの意味に気づかせてくれた場所」
- 「ここに来ることを許してくれた両親、そしてこの学校のことを知った自分に感謝の気持ちでいっぱい」
- 「夢を叶える場所じゃなくて、夢を叶えようとする自分がいる場所」
- 「ドリプラに来る前の自分は凄く暗かった。友だちと話してても、気持ちのそこではいつもさめていた。夢もなかった。素直に笑うことも泣くこともできなかった。一人ぼっちだと思っていた。ここに来て本当に友だちと話していて楽しいと思えるようになった」
- 「人生を変えてくれた場所。夢に夢中になれた場所。たくさん友だちができた場所。私の大切な居場所だった。でも、気づいた。居場所は自分の中にあった。そろそろ現実を見ようと思います」
- 「ズバリ！　わたしにとってこの場所は、今の自分がある原点である。ドリプラに来てなかったら死んでたかも。それくらい思いつめた時期もあったもん。普通の学校に行ってたら、今ごろ身も心もボロボロだったと思う。本当だったら小さい頃に作られ

てる性格とか全部、沖縄に来てからできたもん！　まだ完璧じゃないけれど、この３年間でベースはできたと思う！　卒業後のことはまだ何がしたいとか考えていないけど、私なりに色々学びながらこれからも成長していくぞ～」

- 「一人ひとりの行動次第で向上もできるし、下落もできる。やっぱり自由ってことのムズかしさはここに来てわかった。中学の時はひたすらワケもわからずに自由になりてーとか思ってた。それは難しいよね」
- 「昔はよく、『あ～今日もダルイから休む』とかやってたけど、今はそんなこと自分自身が許せない。一日一日が大切。休むのがもったいない」

（６）おわりに

「今まで普通の学校と感じていた学校は、普通じゃないのかもしれない」。DPIS を訪れた私たちゼミ生全員が感じた事だった。ここでいろいろなものを見たり、聞いたりして、私たちの知っている、もしくは思っている「常識」や「普通」に疑問を感じずにはいられなくなった。ここの子どもたちは逃げ出してきたのではない。自分の人生を自分で切り拓こうと、ここに前向きな心でやってきている。そして日々何かを見つけようと闘い、また日々何かを得ている。ネガティブな雰囲気はこの学校にはない。みんな互いに良い影響を与え合いながら、成長しようという空気があふれている。そして、常に子どもたちのためにより良い学校づくりを目指しているため、カリキュラムにも柔軟性がある。私がインターネットの DPIS のホームページでみたカリキュラムと、今回訪問してみたカリキュラムとではすでに異なっていた。これは子どもの興味・関心・才能・能力によってカリキュラムを常に変えていくという理念があるためだ。カリキュラムだけではない。学校全体がつねに変化していく。私たちが次に訪れる時もまた違う、より向上した姿を見せてくれると思う。

私たちが訪れた時には、学校のパンフレットを子どもたちが作ったものに変えようという試みが行われていた。「もう私たちが作ったパンフレットは全部なくすんです。子どもたちの作ったこっちの方がとびきり素晴らしいものだし、DPIS の姿をよく伝えていると思うから。」と、新しいパンフレットの原案を渡してくれながら、スタッフの白井智子さんがおっしゃった。日本の中でも子ども達の中にこれだけの多様性がでてくると、今までの考え方や概念では、既存の社会や学校において多くの矛盾が出てくることを私は身を持って感じることが出来た。

DPIS では白井さんをはじめ、多くの素晴らしいスタッフの方々、お話を聞かせて頂いたマキノ氏にここであらためてお礼を申し上げます。これからも変化し続ける DPIS、そして「Only One」を目指す子ども達にエールを送りたい。その気持ちを込めて、３月末の卒業式に、卒業生の数だけ　－30 本の赤い薔薇の花－　を送った。

4. 沖縄国際大学訪問
―同じ場所での体験の積み重ね

松下道子

＜編集者から＞

異文化交流論ゼミでは平成12年度にタイへのフィールドワークを行った。ＳＶＡシャンティ国際ボランティア会が山口県のＮＧＯ団体シャンティ山口と一緒に活動を行なっているタイのパヤオ県センサイ村、そして、バンコクのスアンプルー地区とクロントイ地区への旅だった。

近年、ＮＧＯではスタディーツアーを財源確保の一つとしており、400近くある団体の半数は何らかの形でスタディーツアーを実施し、年に４、５回も一般公募するような団体もあることが報告されている。参加者としては20代の大学生や若者、そして女性の多いことも報告されている。

沖縄国際大学は、私達の先輩が訪問した翌年から続けて上記の同じ場所に学生を送り込み、ホームステイを含めたプログラムへと発展させている。ＳＶＡシャンティ国際ボランティア会に支払う手数料は学生１名につき１万円程であるが、現地職員との連絡やアシスタントなしでは、タイ語や少数民族語のできない教員・学生がスタディーツアーを行い、また地域に入っていくことは難しい。同じ地域へ毎年出かけるプログラムにはメリット（訪問後の事後活動への発展）もあるが、問題点もある。それらをどう克服しているのかについて伺ってみることとした。

（１）はじめに

今回訪問をお願いしたのは、「沖縄国際大学総合文化学部人間福祉学科」の専任講師である岩田直子先生である。岩田先生のことを知るきっかけとなったのは、一昨年私たちのゼミの先輩がタイのＳＶＡにフィールドワークに行き、その際にお世話になったＳＶＡバンコク事務所長の岩船氏、東京事務所の佐久間氏からご紹介いただいたことによる。２年間続けて行ない、また今年も同じ行き先で３年目を準備中という沖縄国際大学のスタディーツアーのスケジュール、目的や成果、参加学生の声を聞き、私達の先輩が残した報告書と比較することなども目的として訪問させていただいた。

（２）岩田直子先生にインタビュー

２月１９日（火）、沖縄に到着して２日目。朝８時50分にホテルを出発し、車で沖縄国際大学へと向かった。ホテル近くの風景はサトウキビ畑などが続いており長閑な感じがしたが、大学へ近づくにつれ市街地へと変わっていった。大学に着くまでに、いくつかの基地の側を走った。すぐ近くには数年前ニュースでよく耳にした「普天間基地」もあった。基地全体がフェンスに囲まれ、そこだけが別の空間になっており、基地を見るのが初めて（岩国基地を除いては）の私達には異様な雰囲気と恐ろしさを感じた。

時間ちょうどに着くことに気を使ったが、沖縄には「沖縄タイム」というのがあるらしく遅れても大丈夫ということであった。沖縄国際大学は建物が大きく、何となくアジア風の校舎を取り巻く木々の花々が綺麗であった。図書館は特に充実しているようにみえた。私たちが訪れた５号館は、キャンパスでもひときわ目立つ校章のはいった６階建ての建物で、コンピュータ教室、LL教室、留学生学友会交流会などがあった。

研究室の外で待つ間、基地を飛び立つ飛行機の爆音がすごく、ほんとうに怖いと感じた。岩田先生へのインタビューは、研究室ではなく会議室で行った。その会議室からも大学キャンパスのすぐ隣りに延々と広がる基地が見え、沢山の飛行機が並んでいた。このような環境で勉強すると、世界観も異なってくることと思う。

岩田直子先生は沖縄生活４年目の「やまとんちゅー」で、とても明るく笑顔のすてきな

先生であった。以下、私たちの交わした質疑応答を簡単に記す。

Q：タイへは、どのようなスケジュールで行かれたのですか？
A：昨年は、９月１５日（土）から９月３０日（日）に行きました（報告書をみる）。事前に５回ほど研修会を開いて勉強したり、向こうでやるための踊りを練習したりしました。沖縄の学生は空手とかエイサーの太鼓とか小さいときから習っていて、結構伝統的なことができるのでびっくりします。また、ＪＩＣＡとの食事会やホームステイでは何が必要かといった情報交換をするために、前の年にスタディーツアーに参加した先輩との交流会も開きました。現地では、県人会の中澤さんを訪問したり、SVA、CARE、FAOや総合施設（乳児院、障害者訓練校、盲学校、老人ホーム）やストリートチルドレンの家を訪問したりしました。沖縄の人は海外にたくさん出ているので、だいたいどこにも県人会があります。また、市内観光もしましたし、ホームステイもしました。

Q：タイへのスタディーツアーを始められたきっかけや目的を教えてください。
A：このスタディーツアーは、人間福祉学科の集中講義（２単位）として行われているものです。北欧コースとアジアコースがあり、各10名ずつ参加可能です。また、スタディーツアーを計画する際には旅行会社を通さず、県人会の方が世話をしてくださるので安く、だいたい１７万くらいで行くことができます。目的としては、福祉の先進性を学ぶこと、国際社会福祉の実践を見て体験してみること、人間として文化交流を通して、沖縄らしい国際協力がどのようにできるかを学ぶこと、今後の日本の社会福祉を考えるといったことがあります。北欧コースで福祉の先進性を学ぶというのは普通のように聞こえるでしょうが、どうしてタイということになると思います。が、タイには世界各国からのチャリティ団体や国際ＮＧＯなどが本当にたくさん入っていますから、学ぶことは多いです。

Q：実際にタイへ行かれて、それまで持っていたイメージとの違いや日本と大きく異なっていたことなどはありましたか？
A：学生たちはタイの村のおばあさん達を見て、沖縄の「おばあ」みたいで違和感を感じないと言っていました。また、メディアからは、物価、食べ物、貧富の差などという貧しいイメージがありますが、バンコクはとても都会でした。沖縄の人は日本人としてではなく沖縄の人という意識が強いので、自分達がタイに行くと日本と外国を比較するのではなく、沖縄と外国を比較するという特徴があります。それがおもしろい。

Q：「社団法人シャンティ国際ボランティア会（ＳＶＡ）」の活動についてどうような考えをお持ちですか？
A：ＳＶＡは、日本の中で最も大きなＮＧＯの一つです。ＮＧＯの活動はとかく活動を行なう一箇所に集中してしまい、活動が行なわれている地域とその周りとの格差ができてしまいます。そうした中で、ＳＶＡは日本とタイで同時的に活動を展開しており、またアジアでカバーする地域も多様なので良いと思いました。ただ、残念だなと思うことは、すぐにスタッフが変わっていくことですね。

Q：社会福祉の観点から、村の寮や保育園、パタヤの施設などについてどのように感じられましたか？
A：今の日本の社会福祉は分業化されたやり方で行われているために、国内でしか通用しません。例えば、パタヤなどではタイのニーズに合わせながら、アメリカの力をうまく使っていると思いました。トータルで地域の活性化をしているところが良いと思いました。

Q：スタディーツアーを通してどのような成果がありましたか？また、参加学生にどのような変化が見られましたか？
A：スタディーツアーに行った学生の１期生のなかには、卒業後にパタヤへボランティアをしに行った学生もいます。タイの大学へ留学する学生もいます。そして、大学祭の模擬店でお金を集めるなど楽しみながら教育支援をしたり、シャンティ寮に古着や楽器を送ったりしています。そうしたなかで、学生同士の繋がりが強くなっています。

Q：スタディーツアーの体験をへて、実際に始めた活動などありますか？
A：昨年は国連の「国際ボランティア年」だったことから、学生主体のボランティアのイベントに参加しました。そして、ＪＩＣＡの国際交流フェスティバルのシンポジウムに出席して、自分達の活動を発表しました。また、授業で発表したり、学外で講演会をしたり、古着や楽器を集めたりもしています。

Q：「体験の搾取」で終わらないために、何をすべきだとお考えですか？
A：やはり一番大切なことは、事前学習をすることだと思います。事前学習をすることで、自分たちがどういう立場で行くのか、何をしに行くのかを十分理解しなければならないと思います。みんなで話し合い、みんなで考えて、準備して行くことが重要であると思います。そして、事後活動につなげていくこと。

（３）写真を見て考えたこと

スタディーツアーの写真を見せていただいた。初年度はＳＶＡの活動するセンサイ村で、２年目は同じくＳＶＡが活動を展開するタイとラオス国境の村でホームステイを行なっている。ちなみに、私達の先輩はセンサイ村で少数民族の子ども達のために建てられた学生寮に宿泊している。ホームステイは学生にとってカルチャーショックであり、貴重な体験となったようである。交流会で沖縄の伝統文化を紹介する学生、そしてそれにこたえて少数民族の伝統文化を紹介するタイ山岳民族の子ども達の姿が印象的であった。同じマイノリティとして通じあるもの・発信できるものをもっているということは、ある意味では、もしかしたらグローバル時代の強みにもつながるのではないだろうか。岩田直子先生は「沖縄の」という言葉を何度も口にされた。「うちなんちゅー」の学生達は、このスタディーツアーを通して沖縄の人である自分達のアイデンティティを再意識していくのだろう。

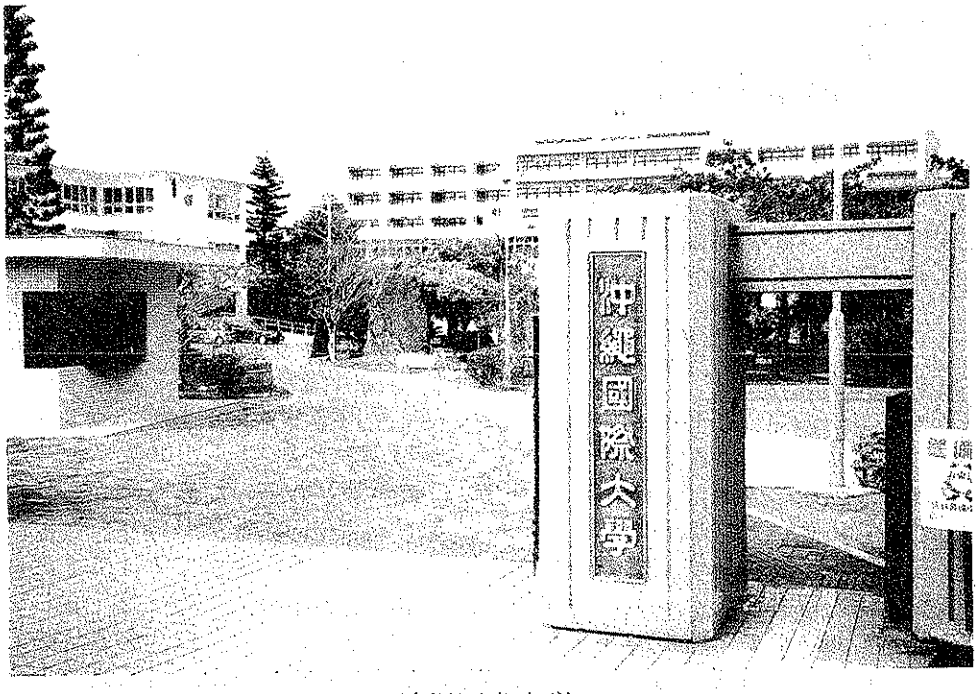
パタヤのアメリカ系チャリティ団体が運営する施設は、内容が充実しているようであった。例えば、障害者の職業訓練施設の話。一般に途上国での障害者の地位は低いようなイメージがあり、また社会福祉もそれほど充実していないのではないかといった感じがする。パタヤは観光地であり、観光地につきものの様々な問題があるため、この団体では母子家庭やストリートチルドレンを保護する施設も運営している。国際ＮＧＯが資金的な面を援助し、実際の運営は現地の人に任せる。そんなやり方が成功している例であり、世界中から見学者やボランティアなどの訪問者が絶えないということであった。

沖縄国際大学のスタディーツアーの成功の秘訣は、学科内に北欧コースとアジアコースが設定され、単位となることである。だから、国際福祉という明確な視点のもと、同じ地域でも内容を深めるたり、また特定団体との連携を強めることで、学生が満足するプログラムを用意することができる。同じ地域で設定されていれば、特定の教員が毎年関わらなくても、引継ぎを行なうことによって、学部教員の多くが交代でかかわれる。北欧コースとタイコースでの２つの体験を発表しあうことで、２つを比較し、さらには日本との比較も可能だろう。そういういった発表は、スタディーツアーに参加していない学生にも新しい情報や視点をもたらすきっかけになるだろう。

（４）おわりに

今回の私達の訪問は春休み中であったため、学生自身から直接話を聞くことができなか

ったのが残念であった。私たちの先輩が行ったタイへ同じようにスタディーツアーで行かれているわけであるが、行き先や訪問するＮＧＯは同じでも、「国際福祉」という異なった観点からのスタディーツアーの内容は、「異文化交流」という私たちの視点からのスタディーツアーとは違ったものに焦点が置かれていた。沖縄国際大学の学生たちがスタディーツアーを終えた後に、報告会やシンポジウムをして発信したり、教育支援などの行動に移したりしているということを聞き、そうやって関係を続けていくことがどれだけ重要なことかを改めて確信した。いわゆる「体験の搾取」から学んだことを大切にして、「体験の搾取」で終わらないために何をすべきかについて自分たちで考え、実行するということ。このことを、私達は沖縄フィールドワークの後でどう実現させることができるだろうか。



沖縄国際大学

米軍基地

5．戦争と平和について考える
ーかたりべと出会って

谷口　朋子

＜編集者から＞

小説や映画、展示など、ひめゆり学徒隊の描かれに方には様々な議論がなされてきている。何が、どちらが、誰が正しいということなのか。とにかく行って自分達の目で見てみることとした。

ひめゆりは花の名前と関係はない。沖縄県女子師範学校（交友会誌の名前は「乙姫」）と沖縄県立第一高等女学校（校友会誌の名前は「白百合」）の両校が併設されることになり、「姫百合：ひめゆり」となったことに由来するという。沖縄県糸満市に開設された「ひめゆり平和祈念資料館」は、この同窓会が建設した私設の資料館である。毎日多くの観光客が訪れ、献花の耐えることがないという。

私達が泊まったホテル、すなわち沖縄中西部に上陸したアメリカ軍は、南へ南へと日本軍や沖縄住民を追い詰め、沖縄南部は文字通り焼け野原となった。降伏後に捕虜となり、北部に設置された収容所にトラックで送られた軍人や住民は、沖縄北部に緑が広がっていることに驚き、地獄と天国の違いを実感したと言われている。その地獄の一端にタイムスリップすることが、ひめゆり平和祈念資料館と平和祈念公園の訪問目的であった。

（1）ひめゆり平和祈念資料館

ひめゆり平和祈念資料館と平和祈念公園は、沖縄本島の一番南に位置する。私たちは高速道路を一気に南に下って行った。静かに広がる海、丘、サトウキビ畑を過ぎていくと、突然大勢の観光客や修学旅行生と見られる人々が集まる場所があった。それほど広くない資料館の入り口前で多くの人々が集団写真を撮ったりしており、通り抜けるのも一苦労なほどだった。入り口で「献花はいかがですか」という声がし、ガマの前の記念碑の前にたくさんの菊の花が捧げられていた。

この日最後の「かたりべ」の時間がせまっていた。資料館に入ってすぐに、私たちはかたりべの話を聞きに走った。この資料館は「永遠に世界平和を訴えつづけることこそが、尊い生命を失った同級生や先生の鎮魂」と信じて、沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会が1989年に設立したものである。今も同窓会をはじめとして県内外の人々の協力で運営されている。かたりべもひめゆり同窓生である。実際に恐ろしい戦争を経験した人々が、現代の戦争を経験していない人たちに戦争の恐ろしさ、平和の大切さを伝えようと、ボランティアとして順番でこの資料館に足を運んでいるそうだ。恐ろしい戦争体験など思い出したくもないだろうが、「再び戦争が起こることのないようにと、こうやって自らの戦争体験を語り継ぎ、戦争の実相を訴え続けるのだ」と言われていた。聞いていて、かたりべであることは本当につらいことだろうと思った。「毎回資料館に来ると、必ず亡くなった同級生の写真に向かって『今日も来たよ』と声をかける」のだそうだ。どんな気持ちで声をかけておられるのだろうか。

資料館には戦前の様子、沖縄戦に至る過程、戦争中の様子などが詳しく説明され、亡くなった生徒たちの200余枚の写真や、生き残った生徒たちの生の証言が展示室の四方に掲示されていた。また、ひめゆり学徒隊が動員された南風原（はえばる）陸軍病院の内部の様子も実物大に復元され展示されていた。沖縄戦は地上戦だったため、病院といっても山や森の中に壕を掘って作ったものだった。中は狭くて暗くてベッドも板で作ったごく簡単なもので、病院としては非常に不衛生な所だ。私は中学校の頃に『ひめゆりの塔』という映画を見たことがあるのだが、この壕での様子なども細かく描写されていたのを思い出し、実物大の模型を目の前にすると心が締め付けられるような、なんとも言えない気持ちにな

った。このような壕の中で、看護学の知識もない女生徒たちが薬もない不衛生な病院で、看護婦として次々運び込まれてくる兵隊の治療・看病をしなければならなかったのである。また、砲弾が飛び交う中、身の危険を覚悟で食料や水の確保に走ったというのは、どんなに怖かったことかと思う。

かたりべの話は続いた。南部撤退の際には重症患者には毒物入りのミルクを渡して壕において行かざるを得ない状況下で、また同級生が目の前で打たれ死んで行くのを見て、女生徒たちは辛い思いをしたという。実際にはひめゆり学徒隊の犠牲者は、学徒隊の編成時よりも、解散命令が出された後の方がひどかったという。日本軍さえもどちらに逃げてよいかわからない状況下で、解散命令を出された少女達は投降も許されず、丸腰で米軍包囲網の中に放り出されたのであった。ひめゆり学徒隊の少女たちは、私より２つか３つ小さいだけで、ほとんど同じ世代だった。私と同じような年齢で悲惨な死を遂げたことなど、現代の日本では考えられないし、このような凄まじい経験をした末に生き残った人々の気持ちも想像がつかない。しかしこれは本当にこの地で起こったことなのだと、彼女たち一人ひとりの顔を見て、またそれぞれの想像を絶するような体験証言を読んであらためて考えさせられた。

資料館に到着した時に見たひめゆりの碑と献花を、帰りには異なった目で見ることができた。学徒隊の鎮魂、平和を祈り、他の人々のようにその前で集団写真を撮ることなど、もはや考えられなかった。「お疲れ様」と受付に声をかけて帰られるかたりべの姿を黙って見送った。

（２）平和祈念公園

ひめゆり平和祈念資料館の後、平和祈念公園に立ち寄った。ここは摩文仁の丘として知られるところであり、平和の礎が立ち並ぶところである。2000 年の沖縄サミットでは、ここでクリントン大統領が演説をしたシーンが放送された。 公園に入ると、戦没者の名前を刻んだ石が左右両側に広がっている。県別に、そして沖縄の市町村別に、多くの氏名が刻まれている。同じ苗字がいくつも続いているのは家族全滅に近い状態だったのか、あるいは親族の多くが亡くなったことが想像される。人影のまばらな平和祈念公園は、それまでのひめゆり祈念資料館の雑踏のような人ごみと対照的だった。

どこまでも、どこまでも続く人の名前。それらを通り過ぎると、海につきあたった。コバルトブルーの海が、断崖絶壁の下に広がっている。この海に追い詰められて亡くなった方も多い。海の向こうに簡単に行ける現代の私達には想像もつかないことだ。左手には沖縄風の近代的な建物となった平和祈念堂が立ち、ガイドさんを先頭に観光客がこちらに降りてくるのがみえた。いつか空には夕焼けが広がり、海の青さとコントラストをつくっている。

公園には色とりどりの花が咲き、散歩をする人、子ども達を遊ばせている人などがのんびりした時間を楽しんでいた。戦後すでに 57 年となる。沖縄返還からは 30 年。沖縄戦で地獄となった南部と、緑を残した北部。現在、観光リゾートなどで発展している西部と、取り残されたような東部。でも日本全体からみれば、経済的に遅れているといわれる沖縄県。何が幸福で、何が平和なのか。自然は豊かでゆとりや時間があっても仕事がないのと、経済発展をしていても自然もゆとりもないのは、どちらが幸福なのだろうか。そんなことをふと思わせる何かがここにあった。

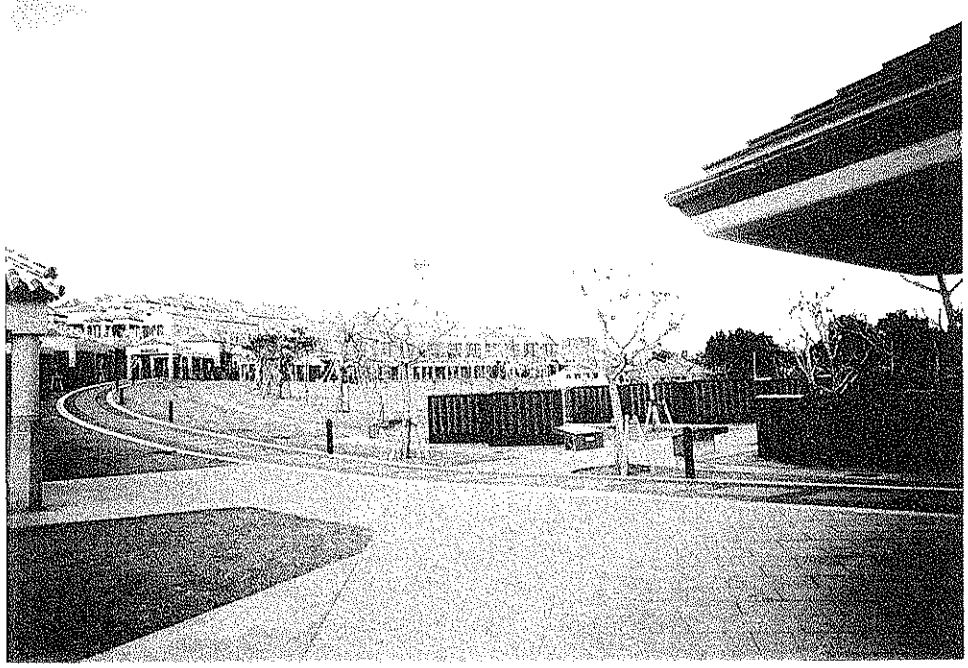
（３）おわりに

今回の訪問は戦争と平和について考える機会となった。それは、ひめゆり学徒隊の写真や、平和の礎に刻まれた名前、すなわち、死者について考えること、亡くなった一人一人の人間やその失われた人生について考えるという機会であった。なぜそのようなたくさんの犠牲が生じてしまったのか、その人々の犠牲の上につくられたという今の私達の繁栄をみて、その方々に声があるとすれば何と言われるだろうか。

これは、現代の問題に置き換えれば、例えば、紛争や難民、環境や食料、保健や衛生、児童労働や南北問題などの現実の諸課題に通じるものではないだろうか。平和で経済的に豊かな生活を送る人々の影で、栄養不良による流産や死産で生まれてもこれない人、栄養失調で亡くなる人、薬や医療がほどこされずに病気で亡くなる人、戦いに巻き込まれて命を落とす人などが数多く存在する。途上国を中心に世界中で毎日３万５千人の人々が亡くなっているという事実、先進国では過去の二度の大戦で亡くなった人よりも交通事故や自殺で亡くなる人の方が多いといったような事実を、どう考えたらよいのか。

亡くなった人の命は、今生きている人の命と等しく尊い。途上国で生きる一個の命は、先進国で生きる一個の命と等しく尊い。「私の命」は「あなたの命」と等しく尊い。そんな当然なことを見失いがちな現代社会になっていないだろうか。

沖縄は観光地として魅力あるもの、楽しいものを前面に出しており、最近では特にダイビングなどを目的とするリゾート観光で人を集めている。一方では、「癒し」を求める観光、エコツーリズムなども次第に知られるようになってきた。そんななかで、沖縄戦の記憶や基地問題は見過ごされがちになっているのではないだろうか。



平和祈念公園

パートII：沖縄で異文化体験！

・ミンサー織り　　＜H.O.＞

琉球村は沖縄の家屋を移設し、そのなかで伝統的な生活を再現している観光地です。紅型のデモンストレーションをやっている旧花城家。薬草のお話をしてくれる旧比嘉家。クバの葉を使ってワラジや籠を織る旧中曽根家。三線（サンシン）を聞かせてくれる旧玉那覇家。陶芸（ヤムチン）の家、さとうきびの精糖工場（サーターヤー）などなど。

その中に、ミンサー織りという織物を織っている家がありました。柄が同じようなので興味深く思い、家の人に聞いてみると次のように説明してくれました。

「沖縄には、他県で見られないほどの多くの伝統工芸品がありますが、その中でも多いのが織物です。ミンサーもその一つで、いにしえの頃から伝わる八重山の『みんさーふ』という木綿を、藍で染めて織った紺絣（こんがすり）の角帯のことです。帯の柄は、５つの絣と４つの絣が交互に織られ『いつ（五）の世までも永遠にあなたへの愛は変わりません』という深い意味が込められています。また、両端の百足の足に似た模様は、『足繁くおいでください』という意味です。当時は男性が女性の家へ通う『通い婚』で、ミンサーは男女の間で交わされたロマンチックな愛を表現する証として用いられ、島の美童たちは愛しい人のために心を込めて織り上げたと言われています。」

この素敵な柄とロマンチックな話に感動し、沖縄の伝統工芸品の素晴らしさを実感したのであったが、この説明が沖縄の言葉で語られていたら、意味はわからないけど、もっと臨場感があっただろうなと思います。

・沖縄の言葉　＜H.O.＞

沖縄に来てびっくりしたのは、やはり沖縄の言葉が違うことであった。沖縄に着いた途端に「めんそーれ（ようこそ）」と言われ、外国に来たような気分になった。お店で聞く料理の名前も初めて聞く言葉が多かったし、道行く人の会話もたまに出て来る単語しかわからなかった。沖縄の人の言葉を聞くたびに私たちはいちいち驚いてしまった。琉球王国という日本本土とは違う歴史を生きてきて、沖縄の独自の文化があることを改めて実感した。

ここでは、沖縄の学生の日常会話を紹介したい。

＜図書館での会話＞

Ａ：昨日出たレポートもう終わった？

Ｂ：まだどう（いやまだ）。あの先生のレポートはいつも難しいからなー（難しいからね）。

Ａ：だるーなー（そうだね）。でも授業でーげーー楽やしぇ（割と楽だし）、この単位は取らんといけんからなー（取らなければいけないしね）。

Ｂ：でも今日はしに（すごく）疲れているから、今日はもう帰ってあちゃー（明日）にしよう。

Ａ：やんやー（いいよ）。帰りにソバ(ラーメン）でも食べて帰ろうか。

Ｂ：だるーなー（そうだね）。じゃあ行こう。

＊

＜学食にて＞

Ａ：やーさいなー（お腹減ったね）。でも人が多くて座れそうにあんに（ないな）。

Ｂ：あい（あっ）！あの席が空いたよ。へーくーなー(早く)行って座ろう。

Ａ：とう（さあ）、今日は何を食べるかー（何を食べようか）。
　　昨日はソバ（ラーメン）だったから今日はカレーにしよう。

Ｂ：じゃあわん(僕)はハンバーグにしよう。

Ａ，Ｂ：くわっちーさびら（いただきます）。

Ａ：相変わらず学食のカレーは具がないなあ。安いからいいけどよー（いいけどね）。

B：わんぬ(僕)のハンバーグはまっさーさー（おいしいよ）。
　やー（君）もあちゃー(明日)はハンバーグにすれば？
A：やんやー（そうするよ）。

・シーサー（獅子）　＜M.M.＞

屋根の上や門の両端にシーサーをよく見かけた。シーサー（獅子）は、石、陶器、木製の魔除けの獅子像のことである。元々は、寺社や城の門、御嶽（ウタキ）、貴族の陵墓、村落の出入口などに置かれていたという。沖縄の原風景として語られる民間の住居屋根上の単体シーサーや、門に魔除けのシーサーを置く習慣は、明治以降に一般の人々にも瓦葺き建築が許可される頃から浸透し、戦後急速に広まったものであり、意外にも歴史的には古い風景ではない。

赤瓦の屋根の上に鎮座しているシーサーは、屋根ふきの過程で余った瓦の破片を職人たちが漆喰で固めて作ったものが多い。名人ともなると小１時間もあれば１体作りあげてしまうようである。一時はそういう職人が少なくなったが、最近は伝統見直しの気運のなかで息を吹き返しているようである。東北の方に向ければ暴風の災難を除き、南の方向に向ければ火伏せとなるといわれている。

現在では、装飾用置物だけでなくコンクリート建ての家屋の屋根や門柱の上、ポストや各種モニュメント、観光土産の様々な商品に起用され、現在最も知られた沖縄文化のキャラクターの１つとなっていて、県内の至るところでユニークで個性的なシーサーたちに出会うことができた。一見こわそうな顔つきなのに見続けているとどこか愛嬌があり、とぼけているように見えてくる。

雌雄対のシーサーが多く、雄々しく「開口」しているものが雄で、「閉口」しているものが雌とされている。そして、「雄は幸せを運び」、「雌は幸せを守る」という意味を持っているのだと職人の方が教えてくださった。だから、雌雄対になっているのが多いのだと、この時初めて気づき納得した。私は、この話を聞いて早速３体も買って帰った。幸せになれますように！！

・沖縄の伝統衣装（琉装）　＜M.M.＞

私は、NHK の連続 TV 小説「ちゅらさん」で琉装を見て以来、もし沖縄に行くことがあったら絶対にこの衣装を着てみたいと思っていた。色鮮やかで、和服とはまた違った美しさを持っている。今回沖縄に行くことになって、私はこれを密かに楽しみにしていたのである。チャンスは首里城にあった。２千円で琉装を着て記念撮影してくれるというもの。観光客向けで高いかなとは思ったが、みんなで撮ってもらうことにした。

琉装は沖縄の言葉で「うらなーすがい」と呼ばれ、以前は離島や那覇の市場などのお年寄りに見かけられたものである。最近は、もっぱら踊りや芝居のなかでの衣装となってしまった。身幅がゆったりとしていて涼しげで、しかもすっきりとしており、沖縄の風土に適した合理性と美学に貫かれている。

髪は舞踊「花風」に見られる「からじ」が代表的な女性の髪形で、結い上げるのが容易で、寝起きにも不自由が少ないようである。成人男子の髪は、「かたかしら」と呼ばれるが、これは昔中央より偏って髷を結っていた名残からだそうだ。男女ともに簪を用い、その差し方や簪の種類で性別や身分の違いをあらわすものとされていた。

女は胴衣（どうじん）、細かい襞のあるスカート状のかかんをつけ、その上に表着をまとうが、帯を締めないのが特色である。宮廷では、古典女踊りに見られるような打ち掛けを羽織り、夏ものは「たなし」冬物は「棉衣」である。庶民風俗でも「花風」のように、帯を使わず襟下を下紐に挟むのがいかにも涼しげで、これを「うしんちー」と呼んでいる。

着物には掛け襟や端折がなく、男女ともに広袖でたっぷりと仕立てられ、風通しがよい。男の礼服は鉢巻の変形した「はんまち」と呼ばれる冠をつけ、黒朝という芭蕉布を重ね着し、前帯を結ぶ。

私たちゼミ生には男子学生がいないので、男性の琉装をするものがいないのが残念であったが、女性６人がそれぞれ気に入った色の琉装を着て写真を撮ることができ、大満足であった。

・首里城公園にて　<T.T>

いわゆる沖縄観光スポットである首里城公園に行った。すぐに二千円札で有名な「守礼門」が見えた。印刷のイメージから大きい門を想像していたのだが、意外と小さくて驚いた。私たちはその門の前で琉球衣装を見にまとい、記念写真を撮ることにした。ちょうどその時！あのトミーズの雅と健が首里城から出てきたところで一緒に写真に入ってくれたのだ！ワー、キャーといってどっと集まってくる人だかり。大勢の人々に囲まれた私たち（実はトミーズの雅と健）に、一斉にカメラのシャッターがきられたのであった。

そのような興奮状態の中で、私たちは首里城内に入っていった。いくつかの門を通り抜けると、そこには鮮やかな朱色に染まった城があった。沖縄戦で壊滅状態となった首里城の再興と朱色の再現については、ＮＨＫの「プロジェクトＸ」で放映された。朱色と一口にいっても、壁、塀、瓦などなど朱色の色はさまざまで、人々の記憶や文献をたよりに長い年月を通して再現されたものである。

首里城は「城」といっても姫路城のような日本風の城ではなく、アジア風の建物である。だから、最初私は城というより豪華なお屋敷という印象を受けた。首里城の中は資料室になっており、様々な展示品を見て琉球王国の歴史や文化を知ることができた。建物は概観も壮大で美しく、中も豪華な仕様で、特に国王の座る玉座はきらびやかだった。掲示されている資料の中に、沖縄を「中心」とした地図があった。先生が「こうしてみると沖縄は本当にアジアの中心だわね」などと言われていたが、本当に沖縄は中国、台湾や東南アジアにとても近くて、日本列島は地図の隅に九州がちょっと見えるぐらいに描かれていた。これは、琉球王国の貿易や交流がそれらの国々と盛んに行なわれていたことを示しており、日本などとよりは東南アジアや中国との関係の方が、よっぽど深く強かったことがわかる。こうして作り上げてきた琉球文化だからこそ、日本ともアジアとも違う独自の文化になったのだと思う。それは、首里城に展示してある年表からもわかった。それは、琉球王国の歴史には日本の歴史とは全く異なった独自の歩みのあったことを、はっきり示すものであった。

次に、私たちは公園内にある玉陵（たまどぅん）という琉球国王のお墓を見に行った。沖縄独特の大きな破風墓が３基連なっていた。空は今にも雨が降りそうなどんよりした天気で少々気味が悪い気もしたので、私たちはすぐに引き上げた。沖縄のお墓はとても大きくて立派である。道端にもあったのをいくつも見かけたのだが、それらがお墓だと聞いたときはとても驚いた。お墓を親族で守っていく伝統の強いことはコミュニティを大切にする沖縄独特の文化になっているが、それはまた親族以外のよそ者がなかなか受け入れられにくい土壌を生み、また特に沖縄における女性の地位の低さにもつながっていると聞いている。

・うちなんちゅう　<T.T.>

私たちが沖縄に降り立ってみると、そこは日本語の看板や見なれたコンビニがある日本の一風景にすぎなかったのだが、やはりどこかしらアジアの国を思わせる建物や景色もたくさん見られた。通りすがりの沖縄の人も、私たちと少し顔立ちが違うような気がした。話していることも琉球弁なのでさっぱり分からなかった。そういうことが重なったので、ほんの一瞬ここはどこの国なんだろうと思ってしまうこともあった。

沖縄国際大学を訪問した際、沖縄の人についてのとても興味深い話を聞いた。沖縄には現在大学が６校あるそうなのだが、ほとんどの学生が沖縄県民だという。沖縄国際大学も学生の９割が沖縄県出身で、また本土の大学に出ても就職は沖縄に帰ってくる若者が増えているそうだ。沖縄というと一昔前は集団就職で有名であったが、現在では県内志向が強くなっているというのに驚いた。

今日、学生だけではなく沖縄の人々は全て沖縄を愛し、「沖縄人である」という意識（アイデンティティ）を強く持っているという。沖縄ではこの考え方を「うちなんちゅう」という言葉で表してきた。これは「沖縄の人」という意味の沖縄の言葉で、それに対して本土にすむ日本人は「やまとんちゅう」と呼び、区別している。最初は「沖縄は日本なのに、なぜそんな区別をする必要があるのか」と考えたが、よく考えてみると私たちが沖縄で抱く異なった感じのことを考えると、沖縄の人が本土を別ものとして考えてもおかしくないと思った。私たちは山口県を当然のように日本の一部だと考えるが、沖縄県では自らを日本の一部とは考えにくい歴史と現実がある。かつて、昔琉球王国が日本と対等に貿易などを行なっていたように、今また沖縄では、自らと日本とを対等な目で見ようとする動きがあるのではないかと感じた。

沖縄はアジアの文化を多く受け継いでおり、街中にもアジア風の様相がところどころに見られる。そういう中で誕生した琉球独自の文化や伝統、また沖縄の気候風土を、沖縄の人々は誇りを持ち愛しているのだ。そんな沖縄の人々はとても素敵だと思う。現在の沖縄の大学生は、日本の大学生とアジアの大学生とでは、どちらに親近感を抱くのだろう。海外スタディーツアーでは「沖縄」の武道や音楽、舞踊のできる学生が多くいて、交流会は盛り上がると聞いた。そうやって、自分の身をもって「沖縄の心」を海外に伝えることができることはうらやましい。

・国際通り－おみやげ編－　<Y.I.>

国際通りにはおみやげ店が軒を連ね、多食多彩なレストランが立ち並んでいる。三越やOPAのような大型デパートもあり、観光客や若者が多く集まる沖縄で一番賑やかなメインストリートである。

国際通りのおみやげショップといえば、「わしたショップ」の名がトップにあがる。このお店にはお菓子や食材をはじめ、健康食品や泡盛、民芸品に本屋ＣＤまで、沖縄の県産品が勢揃いだ。ちなみに、福岡天神にも「わしたショップ」があり、小規模ながら食品、食材を中心に希望の品が手に入るようになっている。お勧めの品としては、まず沖縄の海水からとれたミネラルたっぷりの塩（スーパーで売っているものはほとんどが工業的につくられた化学塩だそうだ）、さとうきびから精製した黒砂糖などがある。健康茶の種類もいろいろ。長寿食の沖縄の豆腐、海草類なども。

沖縄のおみやげといえば、一般的には泡盛、ちんすこう、琉球ガラス、シーサー、紅型等があがるだろう。なかでも、NHKの「ちゅらさん」の影響が大きく、ゴーヤーマンのグッツ(キーホルダー、ぬいぐるみ、Ｔシャツなど)がいまだに人気で、番組内で出たサーターアンタギーやゴーヤの食べ物も大人気であった。

沖縄アクターズスクールへ訪問する前に、ガイドブックで目にとまったぶくぶく茶屋（琉球珈琲館）でくつろいだ。ぶくぶく茶屋おすすめは、甕コーヒーだ。豆と水を一緒に

つけ込み、フィルターを使わずに上澄みだけで仕上げられたコクのある甕コーヒー（アイス）は、素敵な和陶器のなかに四角い大きな氷が３・４個はいった状態ででてきた。ぶくぶく茶屋のコーヒーは「わしたショップ」でも販売されていたので、おみやげにもお勧めだ。

国際通りを歩いていると、同じ品でも店によって価格も違うので、いろいろまわって価格を見極めて購入すると失敗がない。泡盛は試酒もできるので、私たちは20度から60度まで挑戦してみた。さすがに60度はぴりぴりしてきつかった！

・健康的で長寿の沖縄料理　＜Y.I.＞

沖縄に着いて初めて食べたのは、ホテル日航アリビラから車でちょっと行った花織という店のおすすめ「花織ソバ」だ。一般で言われるソーキソバである。麺はソバ麺というよりきし麺というかんじで、スープはラーメンのような味がした。そして骨までとろけるボリュームのある豚の角煮がドーンとのっていて大満足だった。この店のレジの付近には、筑紫哲也や、kiroro、デブヤの石塚やパパイヤ鈴木などの色紙と写真が飾ってあった。

毎朝ホテル日航アリビラでは、朝食サービス券でバイキング形式の朝食が食べられる。和洋折衷、沖縄料理、ドリンクが並んでいる。中でも気に入ったのは、紫いものパンに紫いもバターをつけて食べることだ。そして、ゴーヤジュースも好評だった。

朝食をたくさん食べ過ぎて、昼食時になってもお腹が減らない状況であったが、首里城を見学する前に「わらじ屋」という店に入り、「長寿メニュー」を頼んだ。玄米ごはん、紫いもで調理されたウムニー、クープイリチャー（もずく酢のようなもの）、煮物などさまざまな品があり、それはとても健康的なメニューで毎日食べ続けたらまさしく長寿になれそうだと感じた。

朝・昼・晩と沖縄料理を食べた続けた。アメリカンビレッジで食べたミミガー定食は、ゆでた豚の耳と野菜を入れて醤油味で炒めてあるのだが、コリコリした歯ざわりに、さすがに豚の耳を想像してしまった。味付けはどこのお店もとてもおいしいので、にがいゴーヤチャンプルにしろ、パパイヤチャンプルにしろ、ヘチマチャンプルにしろ、抵抗なくおいしく食べることができた。飲み物では、ゴーヤジュース、グアバジュース、玄米や米に麦芽を加えた「みき」というドリンクや、デザートのサトウキビアイスや紫いもアイスもとっても健康的でおいしかった。

毎日健康的な食事をしたためか、２時間おき位のペースで皆が皆、同じペースでトイレに足を運び、体内の汚れが全て出たようなピカピカの健康状態になって帰ってきたのであった。（笑）

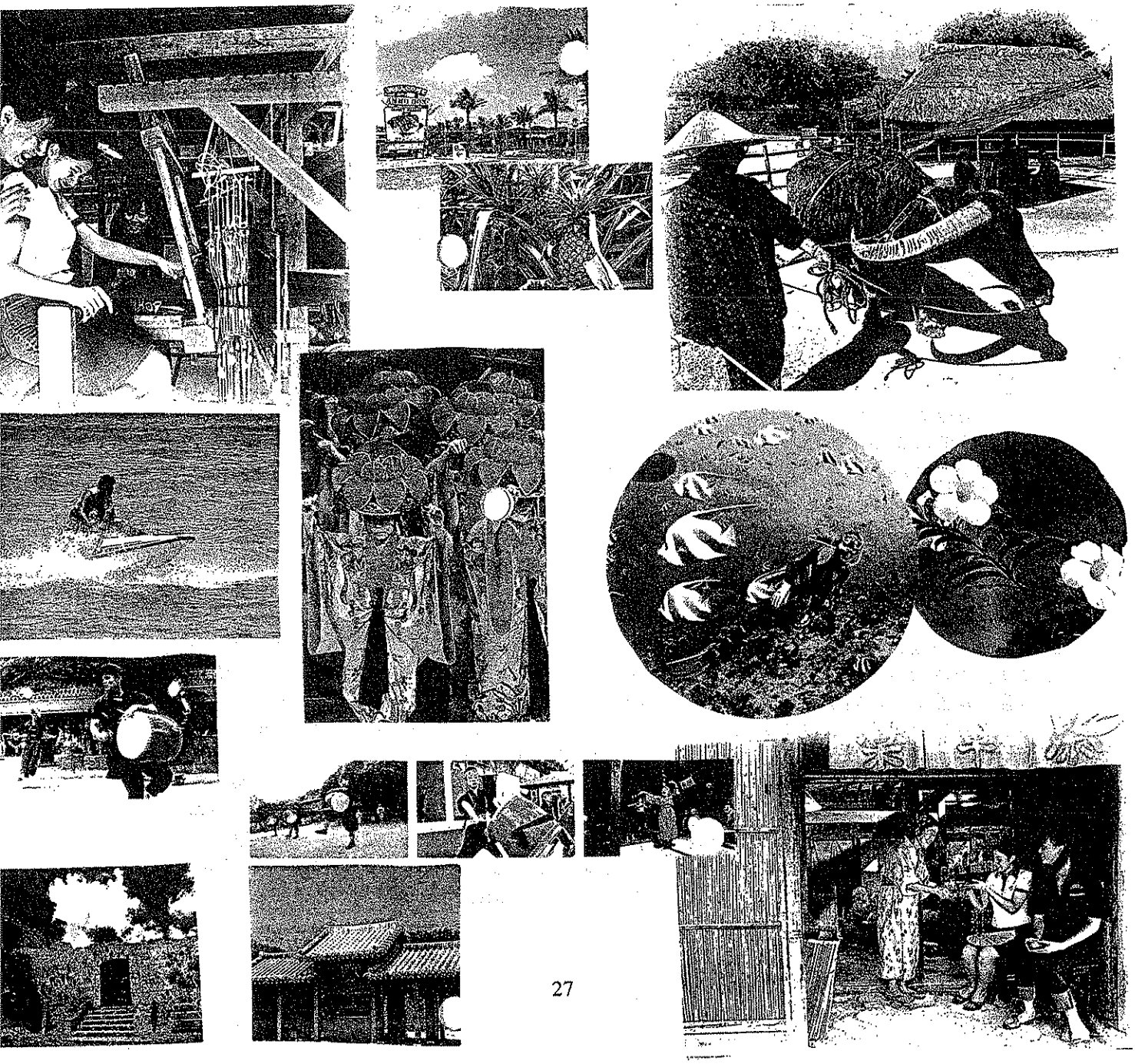
公設市場にて　＜S.Y.＞

国際通りの向かい側、平和通りの奥にある公設市場を訪れた。平和通りは庶民的な商店街で、山口の道場門前と似た雰囲気がある。その平和通りを進んでいくと、次第に道は狭くなり、小さなスペースにたくさんの日用品の店が密集していた。ほとんどの小さな店では年輩の女性たちが店番をやっていたのだが、みんな観光客である私達が目の前を通っても特に売り込みをするわけでもなく、昼のテレビドラマを見つづけている。国際通りのにぎやかさとは対照的な、柔らかいゆたっりとした雰囲気が流れていた。

その小さな店が密集した迷路のような場所を通り抜けると、ありとあらゆる食べ物の並ぶ公設市場へと出た。そこは市民が日常の食卓に並ぶ品々を買うところで、ものすごい人の多さで熱気にあふれていた。店頭には肉、鮮魚、青果、乾物など、様々なものが並べられている。まず目に入ったのは、肉売り場での豚、豚、豚…！　チラガーと呼ばれる豚の顔を筆頭に、豚の足(ティビチ)、豚の耳（ミミガー）、内臓、しっぽ、豚の血のハム…。

もう豚のオンパレード、豚のコース料理といった感じだった。店のおばさんは豪快にゴリゴリという音を立てて豚の足を切断していたが、そこでは日常の光景も私にはすさまじい光景に見え、ただあっけにとられるばかりであった。一方、鮮魚のところに行くと、本土の魚売り場では見ることのできないような魚が食用として売られていた。それは「本当にこれを食べるの？」というような色鮮やかな熱帯魚で、コバルトブルーの巨大な魚、七色に光るシャコガイ、沖縄の海のような色鮮やかな魚介類がたくさん並んでいた。こんなきれいな魚を食べてしまうなんて何かもったいないなあ、とついつい感じてしまうのであった。

市場の二階には小さな食堂が何軒かあり、私達はそこで沖縄での最後の食事をすることにした。それまでまだ食べていなかった様々な沖縄料理を注文した。ヘチマチャンプルー、豆腐よう、ポーポー（沖縄風クレープ）、沖縄風お好み焼きなどのたくさんのものを食べた。ヘチマチャンプルーが来た時、私たちは何の料理か分からなかったので、おじさんに何の料理か聞いてみた。するとおじさんは「ヘチマチャンプルーにきまっとるじゃろうがー」というような言い方をされた。沖縄の人にとっては普通の食べ物なので、出す時に料理名を言う必要もないほど「庶民の食卓」なのであった。



第1章　沖縄アメラジアン・スクールにて

（与那嶺政江さん・息子さんと一緒に）

第2章　沖縄アクターズスクールにて

（B. B. WAVESの次の公演に向けての話し合い）

第3章

ドリームプラネット・インターナショナルスクール

チーフスタッフの白井智子さんと一緒に

コミュニケーションの授業

（「きっかけ」というテーマで自分達の意見を書き発表）

青い空をバックに「めんそーれ沖縄！」

第4章　沖縄国際大学

首里城にて

岩田直子先生にインタビュー

琉球村にてシーサーと

琉球村にて
（エイサーを踊る「村人」と）

ホテル日航アリビラの前にて

名物「花織そば」を前にして

ザ☆ピース！